

旅に出るなら (陸路)

旅行けば

「うぬ！ 何やらふたりの様子がおかしいぞ！ わたしのタオルを何枚もこんな所に積んであるし、シャンプーや薬を引き出しからいっばい取り出して並べてある……。昨日はあちこち電話して、犬がどうのこうのとしゃべっていた。どっかへ出かけんのかなあ？ それにしちゃあ鞆が出てこないなあ……。」

待ちに待った夏休み、以前から計画していた九州地域の調査旅行に、ノイも連れていこうと準備を始めたのは7月の半ばであった。飛行機も、JR各線も、長距離フェリーも、ノイは貨物としてしか扱ってくれないから、これは駄目。この日のためにわが家の車はジープタイプ。後ろの座席を倒せば、狭いダブルベット程度のスペースになるので、宿の取れない時は、ふたり+ワンで、ごろ寝を覚悟の旅である。

アメリカのように、犬同室OKマークの付いたホテル案内が日本で見られるのはいつのことだろう。イギリスでは、うるさい子供が宿泊を断られることはあっても、家族に同伴された犬は、当然驛が行き届いているものとして、拒否されることはないという話を、イギリスの方から聞いたけれど、この考え方には大賛成。さすがグレイトブリティン！ 経済大国とやらで、

世界各地のリゾートホテルに進出している日本のホテル関係者も、欧米に見習ってくれることを期待するや切である。しかし、嘆いているばかりでは、その堂々たる体格ゆえに、人々を少々驚かせたりはするものの、その他の面でご迷惑をお掛けすることは皆無のノイを、どこへも連れて行ってやれない。犬連れのお客必ずしも忌避すべきものでないことを、世の宿泊関係者に啓蒙すべきことをも含めて、できるだけいろんな所へ、ノイを連れて行こうと思っている。

「ワンちゃんと安心して泊まれる」と言う本

近頃は同じ想いの人が多いと見えて、犬連れで泊まれる宿を紹介する本も見かけられるようになってきた。いわく「ワンちゃんと泊まれる全国ペンション・ホテル・ガイド」（愛犬の友編集部編・誠文堂新光社²⁰⁰⁵年度版）「同伴入室可！！愛犬と安心して泊まれる 全国ホテルペンションガイド」（日放P R株式会社編集部編・日放P R²⁰⁰⁵年度版）などなど。

「ワンちゃんと泊まれる・・・」の方には、百六十八軒のペンションと十一軒のホテル旅館が、「安心して泊まれる・・・」の方には百三軒のペンションと五十五軒のホテル・ロッジ・旅館などが紹介されている。これは大変良い企画、愛犬家なら飛び付いて買い求める。が、しかし、である。これで家の子と安心して全国どこへでも旅行が楽しめる！と思ったら大間違い。

どちらの本も、ペンション・ロッジの類がその大部分を占めているのだが、ご存じのごとく、それらは甲信越など一部地域に集中している。全国とはいっても、どこへでもというわけには参らない。さらに、注意して読んでみると、同業者が集中して競争が激しいから、犬連れのお客でも仕方なく受け入れようというんじゃないか、と疑いたくなってくるようなものもある。「ワンちゃんと泊まれる・・・」とうたいながら、「犬の入室不可・ケージ要持参」とはいかなることか！ 因みに「ワンちゃんと泊まれる・・・」の百七十九軒の案内を調べてみた。すると犬の「入室不可」が七十一軒、「入室相談」が二十三軒。つまり、五十二・五割はすんなり愛犬と共に館内に招じ入れられるわけではない。そのうち、四十五軒は小型犬のみ屋内に入ることを許され、わが愛するラブラドル種のように、中・大型に属する犬は、「屋外の犬舎・駐車した車の中・乾燥室の隅に持参のケージを組み立てて・・・」となるのである。いくら「当館はお部屋の窓から見える所に犬舎が用意してございまして・・・」なんて言われたって、見知らぬ所に連れてこられ、他の子の臭いがぶんぶんする犬舎で、しよぼくれている愛犬を眺めながら、のんびりくつろげる愛犬家がいるものか。駐車場の車の中に入れっぱなしにして置くのなら、何もこんな本をわざわざ買ってきて調べなくとも、どんな一流ホテルにだって割烹旅館にだって大威張りで泊まれる。「同伴入室可！！愛犬と安心して泊まれる・・・」の方も、事情はほぼ同じであった。こちらは全百五十八軒のうち、最初から「小型犬に限

る」と言うのが七十一軒。一応「他に迷惑を及ぼさない・トイレの始末は飼い主がする・室内を汚した場合は弁償する」といった、至極当たり前の条件付で、オフシーズンに限ると言うものを含め、入室を認めるのが七十六軒。しかし、まだ「安心して・・・」は出かけられない。

「もしもし、k国際ホテルでしょうか？」

「はい、毎度有難うございます。k国際ホテルです。」

「犬連れなんです、泊めて頂けますでしょうか？」

「はい、何名様で？」

「四名です。」

「ところで犬はどんな犬でしょうか？」

「ラブラドル・レトリバーといってとってもおとなしい犬です。トイレの躰もついてますし、何時も家の中で一緒に暮らしていますから、調度品なんかには悪戯することもありますんが・・・。」

「どの位の大きさでしょうか？」

「三十五^キ位です。」

「えっ！三十五^キ。それは困ります、抱ける位の大きさでないと・・・。」

「でも愛犬の友社の本には『小型犬から大型犬まで・犬の入室可』って、お宅の案内に書い

てありますけど。」

「はぁ……。とにかく大きな犬は困りますので……。」

「貴方は何の係りの方でしょうか？」

「帳場を預かっている者です。」

「社長さんはいらっしゃいますか？」

「社長は只今外出中……。」

「お宅の社長さんはJ K Cで出している『家庭犬』にも記事を書いてらっしゃったけど、大きな犬はお断りなんて何処にも書いてありませんよ。犬と楽しい旅をして戴くために当館は努力していると書いてある……。」

といった具合である。このホテルは、その後、外出から戻った女社長と話が通じ、とにかく宿泊はできたけれど「小型犬から大型犬まで」は、本屋の間違いで訂正を申し込んでいたのでうだ。実際に泊まってみると、給仕のお姉さんを始め、皆に、

「わぁ、良い子ちゃん。小型犬より静かですねえ。」

なんて誉めて貰ったけれど……。

それから少し遅れて出た「安心して泊まれる……」の方にも、このホテルは「中型犬まで可」「入室は室内犬に限る・公共の場は犬を抱くこと」となっている。ラブラドル・レト

リーバーはグループ分類すれば中型犬に入るし、ノイは、何時も室内で暮らしているから室内犬ということになるが……。できないことはないけれど、三十五^キを抱いて歩くのは至難の技である。抱いて歩ける中型犬というのも少ないから、これらの本の中型・大型の概念は曖昧である。

説明を注意深くあれこれ読み合わせた上で、予約を入れ、OKの返事を買っても、まだ「安心して泊まれる……」というわけにはいかない。電話では「お部屋で一緒に……」とっておきながら、胸踊らせて「さあ今日はあのペンションにお泊まりですよ」と、ドライブの末、門前に到着してみると「犬はこちらに繋いでください」なんて薄汚ない床下を指し示され、憤慨して、急遽、別の宿を捜さなければならなかったこともある。その時は、幸い行った先が大泉高原の近くだったから、ペンションも多く、予約なしで他のペンションに気持ち良く泊めて貰うことができたけれど、地域によっては確実に宿なしになること請け合いである。

走る犬小屋出発進行

と言うわけで、現在の日本国で犬連れの旅に出るには、それなりの覚悟がいる。なにやら、宿屋なんてものがなかった平安時代の野宿覚悟の旅じみてもくるが、それと較べれば、今の世の中、何処へ行ってもまず銭湯はあるし、レストランの類に不自由することもない。いや、む

しろ、変な旅館に泊まって、決まり切った料理を食べさせられるより、美味しい地元料理の店を訪問するほうが楽しい。列車や飛行機・船舶に邪険にされたって、運転さえできれば車という文明の利器も活用できる。考えてみれば車は走る犬小屋だ。

「ノイノイ、僕たち食事してくるから待っててね。」

ノイは、この言葉に残念そうな顔を見せる。

「早く帰って来てよ。こっちはもうご飯たべちゃってつまないんだから・・・」

「わあ！ でっかい犬が乗ってるぅ・・・」

なんて、余所の人が車を覗きに来ても、ちらりと一瞥をくれるだけ、

「あんたたち、関係ないでしょ。私、今忙しいの。」

といった顔。ひたすらふたりが消えていった料理屋の入り口に視線を釘付けにして、お利口さんに待っている。車はノイにとって居心地の悪い場所ではないようだ。ふたり十ワンにはちよつと狭いけれど、いよいよの時はこの走る犬小屋をキャンピングカーと思えば良いのだ。さあ、出発だ。

「あー！ やっぱり鞆出てきた。私の旅行用の食器入ってる。やっぱり行くんだ！ 嬉しいな早く行こー！」

ノイの目は輝き、息弾ませてふたりの顔を見上げてそわそわと落ち着かなくなる。

ドックフード
ビスケット
バスタオル 三枚
足拭きタオル 六枚
タオルケット 五枚
夏掛け布団 一枚
コロコロ（抜け毛掃除用）
ウエットテッシュ
シャンプー（セリーングリーン）
チーズ
フィラリビッツ
ボール 二個
ビニール袋の束（排泄物処理用）
消毒薬（チメロサル）
抗生物質（テラマイ軟膏）
耳の薬

目の薬

発熱下痢した時用の抗生物質

皮膚病の薬（ウンデシレンサン軟膏とライデン）

セリーングリーンの十倍液

蚊取線香

女房殿は、ノイの注視を浴びながら、丹念に荷作りをして玄関に運ぶ。人間用はその後のおまけみたいなものである。さらに、行った先でノイとお散歩するために仕入れた折畳み式自転車二台。走る犬小屋の車内は大分狭くなった。おっと忘れてはいけない、足洗い用のバケツと、カメラにフィルム。

午前十一時出発。砧公園を横目に見て東名高速道路に入る。車窓を流れる景色にノイの尻尾は揺れ続ける。午後一時半、三ヶ日のサーブスエリアに入る。東京からの距離は約二百五十キロ。ノイのおトイレタイム。お弁当を買い、浜名湖に面して拡がる公園風の芝生に陣取る。人も多いけれど、広々しているからこのエリアはのんびりとくつろげる。一時間ほど休憩して、再び本線に戻る。今夜は京都の旅館に予約を入れてある。例の「愛犬と安心して泊まれる・・・」日放PRの本に載っていた「高田家旅館」である。京都市内で「大型犬も可」というのはここだけだ。説明によると「京都駅から徒歩八分・客室は和室二十一室・駐車場十四台・宿泊

費大人二万円（一泊二食税込み）。ペットの入室条件付可（客室を汚したときは弁償すること）・ペットのケージ要持参・ペット宿泊料無料・東本願寺大門正面」などだが、何より「旅館の前が二千坪の緑地公園になっており、愛犬と自由に散歩できる。」という一項が魅力であった。ノイは、ご多分に漏れず散歩大好きっ子。ドライブの後は緑地を散策とくればご機嫌で、旅の疲れも消え失せよう。三ヶ日から京都までは二百三十〜二百四十^{キロ}程である。名にし負うきらびやかなモーター群を左右に見ながら、

「ノイがゲートでワンなんて言わなければ、あんなモーターに泊まれるのにな。。。」「なんて言いながら、名神高速道路も尻尾ゆらゆらで無事通過。

京都のお宿

京都の街並が見えてくる辺りから混み始めた、名神高速をあきらめて一般道路へ降りる。初めて見る古都のたたずまいに、ノイ子の尻尾はまた揺れる。午後五時半、高田家旅館到着。

ノイの足洗い用のバケツとタオルを取り出す。駐車場が裏手ということで、今夜必要な荷物を降ろす。ノイ用の夏掛け布団に、タオルケットと大きめのタオル、ノイグッズのボストンバック・・・と、一式揃うと少ない量ではない。運んでくれる番頭さんについて、ノイは、いそいそ玄関へ。

「おいでやす。どうぞお上がりやす。．．．ええがな、ええがな足なんぞ、廊下歩いている間に綺麗になりまんがな。」

「．．．！」

確かにノイはずっと車に乗って来たわけで、三ヶ日サービスエリアの芝生の上は歩いたけれど、車に乗る時にウエットテッシュで拭いたから、ノイが地面の上を歩いたのは、車から玄関に至る数歩だけ。足は汚れていないというものの、このおおらかさ。昔ながらのこじんまりした日本旅館だから、廊下は土足というわけではない。見れば掃除もちゃんと行き届いている。

「おシッコはどうぞ中庭に降ろしてやってあげなはれ。犬連れや云うことやから、お部屋は一階にとらして貰いましたさかい、お部屋に専用の中庭が付いとりますんで。」

取り立ててどうという作りの部屋ではないが、部屋毎に、一坪余りの、玉砂利を敷き植木を配した坪庭が付いている。折角のご好意なのでノイを降ろす、

「んこじゃ悪いや。．．．。」

と思ったのかどうか、ノイはちよっと回りを見回して、用足しはしなかった。

部屋は当然畳敷き。ザツザツザツ。．．．わが家には畳敷きの部屋がない。ノイは茶道など嗜むわけではないが、何故か畳の上をすり足で歩く。畳を汚したり傷めたりしないように、夕

オルケツトを敷き広げる。敷かれた寝具の上を、持ち込んだ夏掛け布団でカバーする。こうしておけば宿の寝具を汚す恐れは、ほとんどない。

「ノイ子はどこで寝るのよ。」

「嬉しい嬉しい。有難う。ここで今夜はお泊まりね！」

居場所が決まると、ノイは、すぐ落ち着く。

夕食後、犬好きのご主人と話がはずむ。旅館には十歳を越えたドウベルマン君がいる。昼間は駐車場にいるこの子が、気に入らないお客さんのチビ犬が乗った車に飛び付いて、ドアに傷を付けてしまい、弁償金をたんまり取られた話、宿泊料の支払いに困ったお客が、却って迷惑なのに愛犬のシェットランドに居残り佐兵次を決め込ませた話と、話題は尽きない。

夜も更けて、涼風の立つ頃、二千坪の緑地公園の散策に出掛ける。それは、東本願寺大門前の大道り中央に設けられたグリーンベルト地帯であった。ちらほらとお散歩している子もいたが、京都の犬が人見知りするのか、“あずま女”のノイ子の大きさに、飼い主が憶測を働かせるのか、お友達はできなかった。両側を車がびゅんびゅん飛ばして行く中で、お熱く抱擁を繰り返しているアベックを横目に、ノイ子はお邪魔しましたと用足しを済ませ、宿に帰る。盆地の京都は蒸し暑いのが難点だが、今夜はゆっくり休めそうである。

ノイの神社探訪

「また、お帰りにも是非お寄りやす。」

の言葉に送られて、午前八時四十五分出発。今日は淡路島にあるイザナキ神社に行く予定。フェリーに乗るべく明石へ出る。夏休みのせいか、フェリー乗り場は車で溢れている。目と鼻の先に淡路島は見えているのに、ここにはまだ橋が架かっていない。

「三時間待ちだつてき。仕方ないね。ノイノイ、散歩行こうか？」

港近くの公園を回り、商店街をぶらついて、ビールと明石名物の蛸焼きを買う。

「これこれこの味！ 懐かしい。」

と、ノイは言わないが、薄いだし汁を付けて食べる卵焼き風の蛸焼きが、すっかりお気に召した様子である。もちろん、蛸は犬の身体に悪いから、食べさせられないので、蛸抜きのお焼きである。ふたりが「美味しいね」なんて言っている物に、ノイ子が異議を唱えたことはない。初めての宿の一夜も、ノイの食欲に影響はおよばさなかったようだ。旅の疲れは見られない。

クーラーをかけたばなしにして、車の中でお昼寝。一時四十分やつとフェリーに乗れた。

イザナキ神社は、日本の島々を、女神イザナミの尊と共に産んだという男神、イザナキの尊を祭った由緒ある神社である。広い境内を巡って手水場へ。ふたりは口を濯ぎ、ノイは喉を潤

す。御賽銭を投げ入れ、柏手を打つふたりに、ノイは頸を傾げる。

「ははあ。こういう所ではこうすんのか！」

ノイの目はそう言っている。参拝を終えて社務所に向かう。もちろん、ノイは先頭に立つ。

「キャー……」

黄色い悲鳴に目をやると、社務所の前で、何か載せた三方を捧げ持っていた緋色の袴の巫女さんが、袴の裾を翻し、一瞬余りもある社務所のカウンターをひらりと飛び越えた。しかも、三方の上の物はその儘である。呆気にとられたノイが、巫女さんを見上げている。

「わー、びっくりしたあ……」

と言ったのは、巫女さんもふたりも同時である。さすがに千早振る神に仕える緋の袴、今のジャンプは神業であった。

「御免なさいね、びっくりさせて。おとなしい子だから大丈夫ですよ。」

「珍しい犬ですね。なんて種類なんですか？」

「ラブラドルっていうんです。」

「ああ、この間テレビに出てたわ！」

イザナキの神は高天ヶ原から下って来て、国土を始め山や海の神から、太陽の神様天照、お月様、それに禍の神様までお産みになった神様だけど、ラブラドルはお産みにならなかった

から、巫女さんが知らないのも無理ないか。

所用を済ませ、境内を散歩していたら、床机を置いた茶店があった。「冷たいわらび餅をどうぞ」なんて貼り紙が出ている。

「ちよつと寄って行こう・・・ね!」

ノイは、美味しいものがありそうな所なら、黄泉の国へでも、ふたりを誘いかねない気配である。

「わらび餅! わらび餅と!」

いい子にお座りかなんかして、舌なめずり。

「甘いもの食べ過ぎると早死にするぞ・・・。」

とか何とか言いながらも、旅に出るといついこちらも甘くなる。

「何処にいても同じでしょ・・・! ノイを殺さないで!」

これは、うちの山の神のお言葉である。

淡路島は海水浴によさそうな海岸線が続いている。泊まるつもりなら、津名町中田に「エバーグリーン」というペンションがあると日放PRの本に出ていたが、予約も入れてないで、今回は先を急ぐことにする。南淡路道路を抜け、鳴門大橋を渡って四国へ入る。高松の会員のお宅を訪問するのも、今回の旅行の楽しみの一つである。こんな機会でもないと、地方の

会員の方とはなかなかお目に掛かれない。

讃岐平野を見遙かす、屋島の丘の優雅なお家にラップちゃんとオリバーちゃんは、ご家族の中に溶け込んで暮らしていた。景勝の散歩コースに囲まれた住環境は素晴らしい。

「ノイさんいらっしやい。ワンワンワン。」

犬舎から飛び出さんばかりの歓迎会の後、みんな一緒にお家に入る。ノイは、ちゃっかり居接間のソファアの上へ。

四国のラブラドル好きの方々も、時々集まって色々と活動なさっているとのこと。

いつまでも名残は尽きないが、瀬戸内の美味しいお魚を御馳走になって、四国横断自動車道に入る。部分開通しかしていない高速道路は通過する車も少なく、静かで気持ちが良い。レストエリヤも貸し切りである。残念ながら、香川にも愛媛にもノイと泊まれる宿はなさそうだ。そのまま走って佐多岬へ向かう。

真夜中過ぎ、八幡浜に着く。フェリー乗り場にごったがえしていた大きな長距離トラックに挟まれるようにして船内へ、二時間半程の船旅である。なぜかフェリーでは、人間は車から降りて船室へ行かなければならない決まりになっている。しかし、ノイは船室に入れて貰えない。船員にわけを話し、ふたりも車内で仮眠することにした。全員横になり、寝よつとするとエンジンの音がうるさくて寝就かれない。船のエンジン音にしては複雑な響きに回りを見渡す

と、それは何れも大きなトラックの発するジーゼルエンジンの音であった。フェリーの上では車はエンジンを切るようになっていたが、トラックのほとんどは冷凍車、エンジンを停めるわけにいかないらしい。運転手たちも、それぞれ窓を締め切った車の中で仮眠している。トラックの積み荷も大切なら、ノイとふたりも大事だから、われわれも真似をしてクーラーをかけ、窓を閉ざす。音は大分静かになった。乗ってきた車がジーゼルエンジンで助かった。幸い、排気ガスは船外に抜けている。夏の夜明けは早い、未だ五時だというのに明るんだ白杵港に船は静かに接岸した。タラップが開く、そろそろと這い出して息を吹き返したように去って行くトラック群を見送り、心地好い潮風に深呼吸、岸壁を散歩してノイのおトイレタイム。早朝の港は人の気配もまばらである。

「静かになったところで、ノイノイ、もう一度寝ようぜ！」

ノイの九州紀行

大分県白杵市は石仏でも有名だが、古いお寺が点在する歴史の街である。白杵川の河口の丘の上に大友宗麟所縁の城址公園があり、引き潮になると一面の干潟が広がっていたものだが、現在はすっかり様子が変わっている。海は沖合遙かまで埋め立てられて町並みが広がり、立派な市庁舎まで建っている。市内観光の後、白杵・坂の市有料道路を通過して豊後の国の国府跡へ

向かう。最近ほどの地方へ行っても、綺麗な舗装道路が続き、瀟洒なドライブインが目に入る。車族には便利だが、ノイにとっては都合が悪い。気分転換にお散歩をと思っても、田んぼの畔道までアスファルト舗装。何処でオシッコしてよいのやら・・・と困り顔。店先に床机を出した茶店風の食事処なら、ノイも一緒に連れて行けるけど、瀟洒なレストランでは、ノイは入れて貰えない。仕方がないから、ふたりが食事の時はノイは車でお留守番。毎回のことだから、

「ちょっとお食事してくるからね。」

の言葉に、ノイはすぐ慣れた。夏のことゆえクーラーをかけっぱなしにして、スベアキーでアロック。ノイは運転装置に悪戯することはないので、その点安心である。

近年の歴史ブームの故か、国分寺の跡は綺麗に整地され芝生が一面に広がっている。隣には素晴らしく立派な歴史資料館が建てられ、近隣の古墳などから掘り出された品々も沢山展示されているけれど、ノイは、穴掘り、もしくは掘り出された物なんかは、全く興味のない子だから、広々した芝生で女房殿とお散歩。

疲れを癒して宇佐市へ向かう。別大マラソンのコース、別府湾に面した国道十号線を北上。静かにたゆたう海を見て、ノイ子は今日も尻尾ゆらゆら、ご機嫌である。

「あ、泳いでる。。。気持ちよさそう！ ね、泳ご！」

ノイのお目々はそう言っている。

「今日は泳がないの。もっと綺麗な海に行ったらね。」

「ここでもいいのにな。。。じゃ、何か食べよ！」

旅の疲れまるでなし、食欲旺盛。遊んでいれば快調なのは、これも飼いに似たものか。

高崎山のお猿さん「只今三〇〇匹」なんて看板を横目に見て、別府の温泉街を通過。ホテルや旅館は腐るほどあるけれど、ノイが泊まれる宿はない。温泉で露天風呂と一緒に入れてくれると聞いて、電話を試してみたのだが、秋まで予約が一杯ということだった。考えてみると、ノイは温泉につかった経験がないわけで、頭に白い手拭いかなんか載つけて静かにお湯につかって居そうもないし、砂湯に埋められればどういふ顔をするか判らないが、今のところ元氣潑刺スタミナ盛々、腰痛も筋肉痛もないようで、湯治の必要もなさそうである。ノイの温泉入浴の楽しみは、もう少し年をとるまで残しておいた方がよいかも知れない。

宇佐の海岸、浜高家には会員のお家があり、ルービーちゃんとアリスちゃんが待っていてくれるはず。先を急ぐ。

三時、到着。ルービーちゃんもゴールドデンのアリスちゃんも、お家の中で目ざとくノイを見つけ、今にも網戸を破らんばかり、ワンワンと歓迎してくれる。

お言葉に甘え、のんびり遊んで、今夜は泊めて戴くことになる。こちらは国東半島の付け根

近く、なだらかな田園が続ぎ、すぐ側には周防灘が広がっている。だが、ご多分に漏れず最近
は浜が汚れているということなので、ノイ子の海水浴はあきらめ、買い物がてら街まで散歩に
行くことにする。

街までは往復十五^分ほど、ノイにとっては、さほど遠い距離ではない。ふたりは折り畳み自
転車を車から引っ張りだす。

ここもまた、綺麗な舗装の農道が続いている。車はほとんど通らないから、ノーリード。土
の畔道を探して遠回り。

女房殿が本屋で地図を選んでいる間、自動販売機のウーロン茶で喉を潤す。ジュース類は甘
過ぎて与えられないが、ウーロン茶は甘味料なしだから、よいだろう。ノイも嫌いじゃないら
しい。食器を持っていない時はよくそうするように、ビニール袋でノイにウーロン茶を飲ませ
ていると、近くのお店の御主人らしい人が声を掛けてきた。

「やあ、お水汲んできてあげますよ。それにしても毛並みの良い犬ですねえ。美味しいもの
ばかり食べてるのかな？」

「いいえ、ドッグフードですよ。質が問題だけど・・・。」

「え？ あのココロコロの？ どれでも同じじゃないの？」

「そいじゃ、うちのも汁掛けご飯やめて、そのフードにしてみるか。」

思わぬ所でフードの説明会になってしまった。ノイ子がきつかけで、待遇が改善される子がいるのなら……。ちよっと退屈そうな顔だけど、ノイは臥せして良い子に待っている。

「お待ちどうさん。さあ、帰ろ。」

会員kさんの手料理に、お酒が進む。ルービー・アリス・ノイの三人組も周りに寝そべって話に加わり、楽しい一夜は過ぎて行った。

ノイノイ神話の国に行く

今日は土曜日だけど、どちらの本にも載っている「カントリーイン・メリーおばさんの家」に電話を入れる。久住高原のペンションである……。やはり満員。残念！

宿なしもまた気楽なものだ。気持ちのよさそうな場所でオートキャンプと決めて、南へ向かう。kさんのお家から十五分も走ると宇佐神宮である。神武天皇が東征の途中、暫く留まって勢力を蓄えた所縁の土地にあり、修学旅行も必ず立ち寄る観光客の多い神社である。バスから吐き出されてきた団体さんに混じって、鬱蒼と生い茂る森の中の参道を歩く。神社は夏祭りの準備で忙しそうである。観光客の真似をしてノイも大きな鳥居の下で写真を撮パチリ。

「はい、もうここ済んだんでしょ。次どこいくの？」

せっかちノイ子が車に急ぐ。

近くに風土記の丘があったので、散策を兼ねて訪れる。こちらは静かだ。一時間ほど遊んで、出発。山越えの道を取って安心院へ出る。スツボンで知られた町である。料理屋を見つけてスツボンコースの昼飯に舌鼓み、ノイ子もちょっぴりお相伴。

精を付けたところで一気に南下して神々の故郷、高千穂へ。山峡の小さな町は夕暮れ間近。神社参りがすっかり板についたノイは、車から降りるとさっさと鳥居をくぐって石段を登る。天孫降臨の伝説を残す高千穂神社は、ひっそりと鎮まっていた。神々が国見をしたという、国見ヶ丘に登る。山峡に屏風のように張り出した丘陵の突端は、公園風に整備され、芝生の続く散歩道は眺望抜群、心地好いそよ風が頬を撫でる。ノイも、どうやらお気に入り様子。駐車場には水場もあり、茶店が一軒あるきりで、周りに人家は見当たらない。来る客もないのかその茶店も閉まって灯かりもない。夕闇の中、たまたま訪れる車は、お熱いデートのアベックばかり。今夜の宿泊地はここと決める。途中で見かけたドライブインまで下って夕食をとり、とって返してキャンプの支度。これは極めて簡単だ。車内の折り畳み自転車二台を外に出して、一番後ろのシートを倒すだけ。シラフを広げてできあがり。星空を見上げ、ムードミュージックを聞きながらオンザロックをちびりちびり。オートキャンプも悪くない。高千穂の峰に降りてきた昔の神々もこんな夜を過ごしたのか……。

自然の中に寝ているから、夜明けとともに目が覚める。顔を洗って拭きだす。ノイも、ぐっ

すり眠ったようだ。

天照大御神が弟スサノヲの悪戯に身を隠したという洞窟を祭る岩戸神社に行く。肝心の洞窟は谷を隔てた向こう側、茂った樹木に覆われてよく拝めない。親切な神官さんの説明にうなづくだけ。それにしても再び岩戸で洞窟を塞いでお隠れにならないようにと、遠く投げられた岩戸が飛んで行った先は長野県の戸隠山だと言うのだから、スケールの大きい話ではある。

宮崎に向かい、延岡でランチ。どちらの本にも載っている日南海岸のペンション「オーシャンP・シー・ドルフィン」に電話を入れる。「同伴宿泊の場合は予約時に必ず申し出る」とあるから、女房殿はノイのことを細かに説明する。OKとのこと。「犬の大きさ中型犬まで可・犬の入室可・ケージ要持参・犬の食事要持参・宿泊料金人間七八〇〇円（二食付）犬一〇〇〇円・全室海に面していて、バス、トイレ、冷蔵庫完備。快適なペンション・ライフがエンジョイできる。テラスに出ると、降り注ぐばかりの星空。ここでいたただく、海の幸タップリの海賊バーベキューは味もムードも満点。ゴーカイに食べて欲しい。」なんて書いてある。言葉遣いがちょっと気になる文章だけど、宮崎はこの一軒だけだし、サボテン公園や青島に近い綺麗な海岸だから場所はよいはず。

五時頃迄に着いてくれということなので、今日の行く先は、西都原古墳群と宮崎神宮にしぼる。

むかしむかし、高天原から下って来たニニギの尊の御陵と伝えられるものを始め、三〇〇余りの古墳が密集する西都原古墳群は埴輪や馬具で知られている。古墳の点在する一帯は環境整備が行き届き、歴史に浸りながらの散策にも適している。残念ながらノイ子は現実主義者のよう

うで、
「うぬ！ この臭いは何だろう・・・？」

なんて思慮深そうに芝生を歩くほうが好きだから、女房殿とお散歩。一人だけ資料館に入る。出てくると、

「どこ行ってたのよ！ 途中であんな所に消えちゃって。こんな所で迷子になったらお家に帰れなくなっちゃうから。」

とても言いたげに飛び付いてくる。やはり旅先では、ふたりが離れると心配らしい。女房殿が、

「大丈夫よ。車とお財布があれば、お家にちゃんと帰れるからね。」
と言ったせいかどうか、宮崎神宮では用事を済ますと、車に一目散。時間があるので寄り道した隼人塚では、車から降りようとしなかった。ノイにとっては、車とふたりが必須条件のようである。

大きいことは・・・

夏休みの日曜日、日南海岸は混んでいた。びっしり詰まった車はなかなか前へ進まない。子供の国から青島にかけて、白砂の浜に紺碧の綺麗な海が広がっている。すいていけばノイ子と海水浴とも思ったが、どこの駐車場も満車。道路は人、人、人の波である。これではどうにもならない。

「ね！見て、見て大きな犬が乗ってる。尻尾振ってるわ！」

「わあ！可愛い。真っ黒だ！歯が真っ白！舌はピンクだ！」

対向車線の車も動かない。窓から顔を出したノイを見付けて退屈凌ぎ、それぞれ勝手なことを言っている。

別荘の点在する小高い丘の中腹に、山小屋風の「オーシャンP・シー・ドルフィン」を発見したのは、四時半頃であった。例によって、ノイのお泊まり道具一式を抱え、玄関に登って行くと、先にノイだけ連れて登った女房殿が、なにやらペンションの主人と揉めている。

「大きさもちゃんと申し上げたでしょう。よいとおっしゃったから、わざわざここまで来たんじゃないですか。今更、大きいから駄目って言われたって・・・。」

ノイは困った顔をして、大人しくペンションの主人を見上げている。そんなに獰猛な顔付きではないのに、大きいだけで敬遠する人がいるものだ。裏の駐車場に止められた、犬小屋代わ

りの廃車の中で騒いでいたコリー君とは、鼻屑目を差し引いても大違い。やり取りの末、とにかくOKを取る。

「ゴーカイに食べて欲しい」という海賊バーベキューは、夕日に映える日南の海を眺めながらベランダでとったが、「蚊蚊の猛襲あり」とは案内に書いてなかった。ノイ子を部屋に待たせておいたのは正解であった。相客は関西からドライブに来たという若いカップル一組だけ。静かなペンションではあった。

夕食後、散歩に出る。この辺りは海岸線に砂浜がない。海辺を走る道路は何やら工事中の様子なので、丘の上、別荘地帯の道に行く。どの別荘も灯かりがっていないし人影もない。空には赤い月が浮き、風が運んでくるのは波の音、モーターらしい建物に、派手なネオンが侘しくともる。

ようやく、蚊の少なくなったベランダに、今度はノイも連れて出る。相客の若いカップルと一杯やっていたら、宿の主人が話に割り込む。なんでも数年前まで信州でペンションをやっていたそうだが、あちらでは同業者も増えたので宮崎の海辺に移って来たとのこと。この稼業も楽ではないようだ。

ノイは身を寄せて、水割りの氷を噛る。穏やかなノイの姿に、初対面の印象を改めたのか、宿の主人が時々親しそうにちよっかいを出す。ノイは「何さ!」と知らん顔。

夕日の岬と阿蘇の宿

今日の予定は霧島を回って薩摩半島は笠沙の岬。二〇〇^キ近い距離になりそうた。それでものんびり朝食をとって出発。宮崎自動車道路に入り霧島屋久国立公園に向かう。最初の目的地は高千穂峰の麗、日本初代の神武天皇を祭る狭野神社。

ノイは、一番先に車から飛び降りると間違ひなく鳥居の方に歩き始める。この食いしん坊が門前の茶店に向かわないのが何とも不思議である。参詣の人が多い神社なら、皆に付いて行くせいかと思うのだが、ここは鎮まりかえって人影もない。

一の鳥居をくぐると、国の天然記念物に指定されている樹齢四〇〇年という杉並木が延々と続く参道である。鬱蒼として聳える杉の林は、気持ちよい木陰の世界を広げている。ノイは東征のおりに神武天皇の道案内をしたという鴉のごとく、振り返り振り返り二人を先導する。木漏れ日に漆黒の艶毛が、時折黄金色に反射する点も鴉に共通する。

「ここでお水を飲んで……。御本殿はこっち……。はいお参り済んだら、社務所の小父さんはあそこだよ……。」

もうすっかり神社犬。ふたりはただノイに付いて行くだけでよい。親切な神社で、帰りに御神酒と神饌を下さる。

山間の道を走り、神武天皇御降誕の地と伝わる皇子原へ。古墳の群がる小高い丘の上に小さな皇子原神社のお社がある。

「ありゃ！ お水飲む所がないや・・！。しーらないっ」と

霧島神宮に回る。こちらは人がぞろぞろ。

「まあ、綺麗な犬！ 一緒に写真撮らせて下さい。」

なんて、ポーズをとってパチパチやっていると、皆さん参拝より観光が目的のようである。早々に切り上げて鹿児島神宮に向かう。ふたりの座席の間に、ノイが顔を出す。ドライブ中の何時ものパターンだ。

「うぬ！ ノイの頭に何か居る。」

不吉な予感に慌てて停車。

「ダニだ！」

早く気が付いたのは幸이었다。取り付いたばかりらしく、未だ血を吸っていない、べちゃんこの憎っくき敵は、もそもそとノイの耳の後ろに潜入しようとしているところで御用。車を路肩に寄せて、全身を詳細に点検する。他にいない様子に胸を撫でおろす。どうやら霧島神宮の駐車場の端の草叢で取り付かれたものらしい。知らない場所に連れて行った時は、御用心御用心。

鹿児島神宮から隼人塚を回り、薩摩半島へ向かったのは既に四時に近かった。高天ヶ原から天下った天孫ニギハヤヒの尊が、山の神の娘コノハナノサクヤ姫と出会い、結婚することにな。伝承の地がなぜか薩摩半島から西に突き出した笠沙の岬である。

川野辺から加世田市を抜けて大浦町へ出る頃は、長い夏の日も漸く西に傾き始めていた。できればこちら辺で宿を取りたかったのだが、どちらの本にもこんな田舎の宿は紹介されていないし、通ってきた道筋にも泊まれそうな宿はなかった。

回れるだけ回ろうということで、夕日に映える、聖なる出会いの岬に車を走らせる。擦れ違う車はほとんどない。美しい海岸線が続く。車を停めて一夜を過ごすのには格好の場所があるが、生憎ドックフードで用を足すことのできないふたりのお腹はべったんこ。数時間走ったけれど、食欲をそそるような店は一軒も見かけなかった。オートキャンプをするにしても、何処かの街まで一旦出なければ、食事にありつけない。坊野間県立自然公園の海岸線を辿って、枕崎市へ着いた頃には夏の夜もとつぷりと暮れていた。活魚料理の店を見つけ、やっと遅い夕食にありつく。テレビの歌謡番組とステレオの歌謡番組がボリューム一杯に同居する、活気のあり過ぎる店だった。これで調査のための訪問地は全部回った。後は、ノイとゆっくり付き合える。一応の打ち上げはよいけれど、今夜の泊まりはどうしよう。

走るだけ走って行ける所まで行こうということになり、指宿スカイライン經由九州自動車道

路に入る。十一時半、えびのの手前のパーキングエリアに車を停めて寝ることにする。えびのから先は、残念ながら高速道路が未だ完成していない。

パーキングエリアという所、ゆったりとグリーン地帯が設けられ水場もあるし、一夜の宿を借りるのには悪くなさそうな場所なのだが、いざ泊まってみると思わぬ不都合がある。長距離トラックもまたパーキングエリアで一寝入りして行くわけで、大型トラックのジーゼル音は夜のしじまに木霊する。冬はどうなのか知らないが、余程大らかな人以外は避けた方がよさそうである。寝坊なふたりもおちおち寝てはいられない。

早起きして、阿蘇の「ペンション・スターリー」に予約の電話を入れる。「ワンちゃんと泊まれる・・・」本には、「犬の大きさ中型・大型犬も可・ケージ要持参・犬の食事要持参・料金六九〇〇円（二食付税込み）・犬の入室は当日の状況にもよるので宿泊予約時に相談して決めることにしている。他のお客様に迷惑を掛けないようにくれぐれも注意して欲しい。ここは三〇〇区画の保養地の一部で、付近には大きな別荘が点在。阿蘇山周辺でも環境の良い場所として知られるリゾート地だ。近くには熊牧場という動物遊園地もある。」うんぬん。

「はい、どうぞどうぞ」

と気持ちよい返事に、寝不足の頭も少し軽くなる。午後一時、

「あーら、良い子ちゃんなのね！ 食堂にもいいですよ。」

と、ここにこ迎え入れられ、ふたりは早速一風呂浴びてほっとする。プレイルームで湯上がりのビールの美味なこと。最高！ 絞りたてという冷たいミルクに喉を潤し、ベットに敷いて貰った自分の夏掛けの上で、ノイも思いきり手足を伸ばす。

日差しは強いがカーテンを揺らす高原の風は心地好い。

「キャンキャンキャン。クンクンクン。」

甲高い声と共に、小さく、身軽な陰が一つ・二つ・・・三つと開け放してあった入口から飛び込んできた。

「なーに、君たち。ああ、お隣の部屋にいた子たちか・・・」

ノイはベットの上で顔をもたげる。ぱたんぱたと尻尾が二・三度夏掛けを叩く。了承の挨拶である。慌てて飼い主が飛んで来る。

「あらあら、すみません。勝手に入っちゃ駄目でしょう！」

久留米から来たご家族連れが今宵の隣人である。お嬢さんがトリミングスクールに通っているとおっしゃるだけあって、おチビさんたちは綺麗に手入れが行き届いている。

「大きな犬を連れただお客さんと同宿と聞いて、心配したんですがラブラドルだったんですか。優しい犬でよかったです！」

夕方、涼風に誘われて自転車を降ろし、最近設けられたばかりというサイクリングコースに

出かける。ふかふかベッドで一休みしたノイも、元氣一杯である。ゴルフ場の横を抜け、別荘やペンションの点在する丘陵地帯を回るコースは、サイクリングにしては登り下りがきつ過ぎる。坂の緩やかな方だけ半周し、一時間ほどで宿へ戻る。

夕食後、皆で飲みましようとのオーナーの誘いに、ノイも一緒に仲間入り。宴の時を過ぎず。

「犬連れのお客さんなんて、滅多にいらっしやらないですよ。お電話いただいたときは嬉しくて・・・それが、今日は二組も！」

とペンションの奥さんは非常に友好的であった。今宵は九州最後の夜である。明日は本州に戻る予定。

やっと泳げた！ 萩の宿

「今度はお仲間の皆様を誘って、是非、またどうぞ。」

オーナーに送られ、十一時半、出発。土鈴とウーロン茶のお土産をくれた。サービスも良く、のびのびできるペンションであった。

今回の旅で海は沢山見たけれど、一度も泳ぐ機会に恵まれていない。ノイと一緒に日本海で泳ぐために、萩市へ向かう。「ペンション萩」という宿が「安心して泊まれる・・・」本に

載っている。地図を見ると海辺の町で、海水浴に適しているようだ。「大型犬も可・入室可・ペットの食事なし・ケージ要持参・宿泊料大人七五〇円（一泊二食税込み）・ペットの宿泊料無料・飼い主が犬を管理すること・史跡と古い町並みを巡るサイクリングの基地に最適」。問い合わせたらOKとの返事であった。阿蘇インター迄戻って、九州自動車道路へ入る。関門海峡を望むレストランで昼食。そのまま中国自動車道路へ乗り継いで、四時間足らずで美弥のインターチェンジ。山間の県道もすいている。松蔭神社・城跡・萩の町並みを横目に見て過ぎる。眺めの良い海岸線を十^キ程走った先に、宿はあった。

早速、水着に着替えて浜へ向かう。ノイの足取りも弾んでいる。松林でトイレを済ませ、水泳準備完了。ざぶーん！

ふたりが水着を着ている時、ノイは、当然自分も泳いでよいものと解釈しているから、何の躊躇もなく、誰よりも先に水に飛び込む。

「気持ち良い……。早くおいでよー……。」

穏やかな海面に、オッターテイルが孤を描き、得意そうな目つきがふたりを誘う。競泳は何時ふたりの負けである。

「ありゃ！ 犬が泳いでる。うまいもんだねえ。」

散歩に来た地元の犬とその飼い主が、しばし足を停める。何処へ行っても、ノイが泳いでいる

と出会う光景だ。

ひと頻り泳ぎ回ると、次はボール投げの催促である。ノイは、海面遠く投げられた物を捕ってくる遊びが大好きだ。砂浜に寝っ転がって、のんびり空を見上げ、なんて趣味はない。間もなく六歳だというのに、ピチピチギャル。今年もタフノイは健在だ。

「今、お風呂空いてますから、どうぞ。そのままワンちゃんと一緒に入って下さい。お湯で洗った方がよいでしょう。風呂場にはシャワーもあるし……。」

昨夜のペンションの陽気な奥さんとは対照的に静かで無口、一見、陰気とも思われたオーナーの奥方だが、根は親切な人らしい。お言葉に甘えてノイをシャンプーで丁寧に洗う。充分泳いで満足したノイは、さっぱりして気分爽快という顔である。

夕食は、海外生活が長かったというオーナーのコース料理。市内はお祭りということだが、ノイは、人ごみに揉まれるのが好きじゃない、部屋で静かに過ごすことにする。今夜もゆっくり休めそうである。

山賊？

今日も朝から良い天気だ。この点今度の旅はついている。静かな奥さんに見送られ、九時半、出発。部分的に未開通な山陽自動車道路を走るかどうか迷った末、中国山脈に分け入って

中国自動車道路の山口インターに入る。この辺りの高速道路はがらがらで、車窓を流れる景色が速い。ゆっくり休んだノイの尻尾もご機嫌に揺れている。

「どうしようか？ もう一晩何処かに泊まって帰ろうか、それとも真つすぐ帰ろうか？」

「このまま行けば、今夜の内に東京へ戻れるわね。」

「ペンションのコース料理もへきえきだけど、ノイといろんな所に泊まって見るのも今度の旅行の目的の一つだしね。昼飯食べながら考えよう。今度のサービスエリアに寄るか。」

深谷のインターを過ぎ、次は吉松、緩いカーブを回ると見通しのよい道はなだらかな下り坂。と、なにやら赤旗をやたら振り回しながら、路肩から飛び出してきた男がいる。

「あいた！ こんな所で鼠捕り……。」

ノイノイ、きよとん。今更ブレーキを踏んでも間に合わない。

「……！」

「お急ぎのところをどうも……。この制限速度は80^{km/h}で……。」

誘導されたサービスエリアには、同じく赤旗に停められた県外ナンバーの車が並んでいる。

地元の車は危険地帯を熟知しているらしい。当方、二十四^{km/h}のオーバー。丁度、ペンション一泊分ほどの金額を申し渡される。

「今後二箇月間無違反なら反則減点は付きませんから。」

と慰められて無罪放免。ついでだから、そのエリヤのレストランに入る。

「まるで山賊だぜあれは……。」

昼飯時のせい、鼠捕りに引っかけたドライバーの多くが、放免後レストランにやってくる。彼らのぼやきはよくわかる。山中に突然出現するところ、言葉遣いは丁寧だが現代の山賊とは言えている。大繁盛のレストランは不味かった。

「このまま帰って、お家でゆっくりしよう。」

午後十時半、見慣れた東京の混雑の中に戻って来た。暫く離れていると、それもまた何となく懐かしく感じるから不思議なものだ。もちろん、ずーっと安全運転でした。

「あ！ 砧公園。お家だ、お家だ。嬉しいな。」

ノイの尻尾が激しく揺れる……。車に乗るのも大好きだけど、ノイはお家が、一番だーい好き。